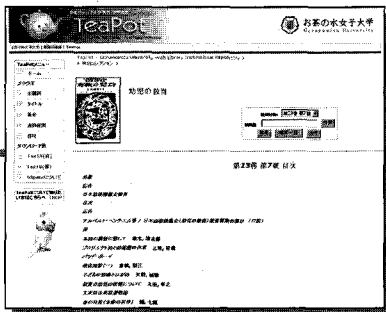


▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (11)

『幼児の教育』を通して 倉橋理論の流れを追う

諏訪義英



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ
クション（略称「TeaPot」）」にてバックナン
バーインターネット公開中。
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

『幼児の教育』がネット公開された意義は大きいと思
います。自宅で原文を読めるということは、図書館通
いに比べて時間的にも経済的にも有効です。幼児教育
史研究の裾野の広がりを感じさせます。

そうだとすると、『幼児の教育』のネット公開が倉
橋研究にどう利用できるのか、自宅で原文を読めるこ
とや、倉橋が、中村五六、東基吉、和田実たちよりは
るかに多くを寄稿していることが瞬時にわかること以
上に積極的な意味はあるのか、関心をそそられます。

▼倉橋の著作を歴史的にたどるヒント

倉橋研究については、湯川嘉津美氏が今年の本誌一
月号で、倉橋の著作を初期のものから歴史的に跡付け
る作業が遅れていると指摘していますが、同感です。
倉橋研究は、全体的には、誘導保育法に収斂するよう
な、保育内容・方法、遊び論、児童観にかかわる傾向
をもち、『倉橋惣三選集』全五巻に収録されたものが
対象になりがちです。二〇〇七年までの大学紀要、日

本保育学会大会研究論文集などを見ても、国民幼稚園論を含めて、戦争中の論考を扱ったものはごく少数に過ぎません。倉橋の思想・理論の体系を探るには、戦中を含めて、戦前、戦後を通して一定の脈絡をもって考えてみる必要性があります。

▼倉橋の歩みを三期に分けてたどる

倉橋は、『幼児の教育』には、一九〇九年二月(第九巻第二号)から一九五五年一月(第五四巻第一号)まで執筆してまいりましたので、一五年戦争を軸にした戦前、戦中、戦後を含むこの間の論文を年代順にたどると、時代を反映した、ある種の傾向が探れるかもしれません。

今までのように、『幼児の教育』の各巻各号の目次に当たる方法や、森上史朗氏の『子どもに生きた人・倉橋惣三』(フレーベル館 一九九三年)の巻末にある『雑誌執筆論説等』に当たる方法はかなりのエネルギーを要します。

ネットで試みると、二つの検索法がありました。一

つは著者「倉橋惣三」に絞って取り出した六一三件の論文一覧です。これは年月的にはバラバラですが、連載ものなど同一タイトルのものはほぼひとまとめに出ます。もう一つは年月順に取り出す方法です。「プラウズ・日付」↓「昇順ソート」↓「プラウズ・著者」とクリックし、表示された著者一覧の中から「倉橋惣三」を選び出しクリックするもので、倉橋の論文が年月順に表示されます。しかし、せっかくできた年月順の一覧表も、異なったタイトルの論文が交互に入り交ざっているので読みづらい。結局、両方法による論文一覧表を併せて読むと若干の傾向が見られます。

戦前期 初期から、一九三三年九月に誘導保育法が発表されたころまでの時期です。

どの時期も論文の内容は多岐にわたるので、連載論文を対象に検索しました。

この期の連載論文関連のキーワード「保育入門」「フレーベル」「自発活動」を入力して検索し整理しま

した(以下の各期も同様です)。

一九二四〜二五年「保育入門」(一)〜(三)

一九二四年「フレイベル自傳」(一)〜(三)

一九二四年「自發活動と目的活動」(一)〜(三)

倉橋は、「フレイベル自傳」でフレイベルを紹介しながら、「フレイベル主義新釋」(一九二二年六月)でフレイベルの「論理的」「象徴的」な考えを批判し、同時に、「自發活動と目的活動」や「保育入門」で、フレイベルを撰取しながら、幼児の自發活動、遊び、生活をして發達などについて考察を続けています。この時期の小論は制度、内容、遊び論、幼児観、保母論など多岐にわたり、その一部は『幼稚園雜草』(一九二六年)に示されていますが、この時期最大の特徴は「幼稚園保育の真諦、並に保育案、保育過程の實際」(一九三三年九月)です。翌一九三四年に『幼稚園保育法真諦』として東洋図書から出版されたものです。いわゆる誘導保育法といわれているものです。

この期の『幼児の教育』に示された論文にはこん

な傾向が読み取れますが、これに止まるとこの期に示された倉橋理論の大事な特徴を見逃し、さらに今後の展開を見誤ります。後に幼保一元化論に結びつく「保護と教育」の一体論や、家庭生活の教育性を前提にした家庭と幼稚園の關係論(制度論)です。

「保護と教育」の一体論は、『社会的児童保護概論』(一九二七年)、『児童保護の教育原理』(一九二九年)に示されます。家庭と幼稚園の關係は、ちなみに「家庭教育」(家庭と幼稚園)をキーワードに検索しても、倉橋のものは四件で、むしろ、『家庭教育総説』『就学前の教育』(共に一九三一年)などの著作に記されています。これらの著作で、誘導保育法が家庭生活の教育性や家庭における親子の自然的な關係を前提にしていることが明らかになります。これを見ると、倉橋が一九一〇年の「子供の想像」という小論で、今日の幼稚園教育の根本問題が教育制度上の問題と保育法上の問題だと指摘した意味がわかります。倉橋の課題の出発点が見えます。

戦中期 一九三一年の柳条湖事件から始まった一五年戦争の中にあつて、時局、戦時を意識した時期です。

この期の論考には三つの傾向があります。

第一は戦前からの流れです。

一九三五年「都市幼児教育の問題」(一)～(三)

一九三六年～三七年「生活訓練(年少組第一～第三保

育期)」(一)～(三)(同じテーマで年長組も)

この「生活訓練」は「系統的保育案の實際」解説と記されていますが、キーワード「誘導」で検索すると、この期のものとして、菊池ふじの氏のを主として「誘導保育」が四八件検出されます。広がりを感じます。

第二は戦時を意識した論調です

一九三八年「幼稚園保育に於ける時局的反省の問題」

(一)～(四)

一九四二年「現時局下に於ける幼児保育」(一)～(三)

一九四三年「戦時保育の本義と實際」(一)～(四)

一九三七年日中戦争開始と共に日本は国民精神総動

員体制に入り、その総動員中央連盟の委員になった倉

橋は、「……時局的反省の問題」(一)で総動員運動が目

標とした「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」を幼児に

どう教えるかを語ります。そもそも倉橋は、時局に際

しても「常に社会の動きを教育に利用する事」を考え

ている者として、「時局をどう我々の教育に活かして

行けるか……考えていい」(88頁)と言います。その結

果、国家的要請を幼児の発達に即して論じているだけ

に、かえつて幼児が発達段階に即してその要請に向け

て順調に教育され方向づけられている感さえします。

時局に対して同じように臨んだ結果、国民学校が

「国民ノ基礎的錬成」の場とされ、家庭が文部省の

「戦時家庭教育指導要領」で「子女錬成ノ道場」と

なった時、家庭生活の「さながら」を前提とする誘導

保育法が変容します。ここではいちいち論証しませんが、

一つは、誘導からの逸脱ともいえる儀式や形式を

重んずる方法であり、もう一つは、時局に満ちた家の

生活を前提として、誘導保育が国家的要請に込められる

うになったことです。

第三は国民幼稚園です。

一九四〇年「國民學校と國民幼稚園」(二)〜(四)

一九四一年「國民幼稚園の名に於て」(二)〜(八)

一九四二年「戦時國民幼稚園」(二)〜(二〇)

国民幼稚園の提言はこの期の大きな特徴です。それ

も小学校が国民学校に変わり、国民教育が国家的課題になったことに対応しています。国民教育を徹底するには、制度的に下に位置づく幼稚園がその下地をつくる必要性があること、教科の関連性をもたせようとする国民学校の方法と幼稚園の方法が類似していることが国民幼稚園の根拠です。

さらに重要なことは、国民幼稚園では、今までのように二つの施設が制度的に併立すべきでなく、環境や家庭に即して多様であつていいとしています。現在の保育状況を想定したかのような提言です。

戦後期 民主化を意識し、子どもの個性を重んじなが

ら子どもの内面に向かった時期です。

一九四六〜四七年「保育者の新しいノート」

(二)〜(二〇)

一九四六年「民主的性格の方向づけ」(二)〜(三)

一九四七年「学校教育法における幼稚園」(二)〜(四)

一九四九年「和の教育」(二)〜(四)

一九五三年「人間の涵養」(二)〜(五)、拾遺(一)、二

一九四九〜五二年「子供讃歌」(二)〜(二九)

倉橋は「保育者の新しいノート」(二)の中で、「私達の幼稚園に『戦争』の一つの小さいかけらも残っていないでしようね。おはなしにも唱歌にも遊戯にも。

子どもが心なく描く絵にもつい歌う歌にも。それから、又取り除き忘れた額にも置きものにも」(20頁)と言います。戦争が終わって子どもを護つたことに喜々としている様子が伝わります。そして、民主化をうたい、「新日本建設と幼児教育の使命」(一九四六年)の中で、民主的な日本は幼児教育によってこそ生まれるとします。

民主のイメージは倉橋の著『若き公民』（富山房、

一九四八年）に描かれます。家庭、近隣、国を情と義理（相互に自他の幸福を保ち合うもの）で結びつけ、和によって世界をつなぐものです。それは政治、経済、社会構造の民主制とは程遠く、「人間性の涵養」の中で、民主主義とは人間主義であり、その中核に「こころもち」があるとする考えに通じます。この中ではまた、生活の自然な味において優れた幼児期の教育の大切さが強調されますが、これは「和の教育」にも通じ、一九四七、四八年ころの論文では幼稚園の生活形態、特に自然な生活が重視されます。

自然な生活を重視する中では誘導保育法は後退します。それは、戦後の論調から誘導保育法が消え、さらに誘導保育の前提をなす家庭教育論が論じられなくなることと符合するのかもしれませんが、戦後、幼稚園が学校教育法によって学校に位置づけられ、倉橋が「学校教育法における幼稚園」において、幼稚園も学校教育の目的と同一根源にあるとすること

と関係するかもしれません。

全体的には、個別では子どもの個性に、人間相互では心の結びつき、戦前からの「親しむ心」に目を向けその心の内側に歩みより始めています。また戦前から保護と教育の一体化を主張してきた倉橋が、「幼児保護と幼児教育」（一九四六年十二月）で、一元的な「幼児保育施設」を強調したことも忘れてはなりません。

▼最後に

資料を誰もが読める時代はその資料をどんな視点で構成するかが問われますし、研究の深化にとって、資料発掘という昔からの作業の価値は変わりません。夜中に一人パソコンに向かって原文を読む「お宅作業」もそれなりの味わいをもちますが、国会図書館で多くの方がそれぞれのものを求めて資料を探し、読書室で読みふける、その空間に漂うある種の緊張感も忘れ難いものです。

（大東文化大学名誉教授）